

關東のならひ貧民子あまたあるものは、後に産せる子を殺す、是を間曳といひならひて、敢て惨にとを乞らす、貧凍餓に及ざるものすら、倣て此事をなせり、官の教あれども尙乞かり、然るに陸奥白川の傍邑須加川といへる所に、内藤平左衛門といへる豪農、これを歎きて、年毎に縁を求て間曳んとおもふもの有ときけば、其養べき財をあたへて救へり、もと米價賤しき所なれば、多分の費にはあらずと自はいへりとなん、此人篤實類なくて學を好めり、されば是のみならず、人を救ひ、あるひは道橋を造り、慈悲を行ふこと多ければ、領主も賞し給ひて、苗字帶刀をも免され、士に准らへらるといふ、

〔京兆府尹記事九〕長谷川備州死去子息平藏の辨

平藏御改役中略、一封の書を輔佐の重臣たる奥州白川の城主松平越中守殿江定信獻す、○中其趣意は、○中非人多きは國の恥なり、若臣に台命を蒙りなば、ケ様の族を召捕て、兩國の下流、佃島無人島等に於て、身持相應の產業ををしへ、雜費の外は、其者共の徳分と爲致、錢財をたもたしめ、店を爲持、渡世を爲致なばよかるべし、國の元は百姓たれば、其中より撰び百姓に仕立、御料私領に不拘、無人の土地へ有付なば、百姓無之のうれひもなかるべしと言上す、越公殆ど感じ、是聖賢の道なり、能心付たりとて、則上聞を経る所、御感に思召、その奉行を長谷川平藏江被命ければ、既に其御用に取懸りけるにぞ、其美名日本にひき、平藏が仁慈を稱せざるものなし、

〔百家琦行傳〕澤井智明

洛東大和おほ路第三橋の南に大黒屋傳兵衛といふ者あり、數代慈悲家にして家殊に繁昌す、別家數十家あり、○中天明寛政のころは、九代におよぶ傳兵衛なり、氏は澤井、名は智明、經學をこのみ、栗田流の書をよくし、また道學をまなびて、慈悲心ふかく、もつはら貧民を憐み、我家は儉をもちひ、能他の人に物を施す、文化年中、攝河兩國洪水の時も、若干の金銀を投うちて、窮民を救し事